

留学生支援と異文化理解を目的とした教養科目  
-サマープログラムのためのサポーター育成の実践と課題-

General Education Course for Supporting International Students and Promoting Intercultural  
Understanding

-Creating Supporter Training Opportunity for Summer Intensive Program-

国際戦略推進機構 金 蘭美・半沢 千絵美

キーワード：留学生支援、異文化理解、サマープログラム、サポーター

外国語キーワード：International Student Support Activity, Intercultural Understanding,  
Summer Intensive Program, Supporters

要旨

本学国際戦略推進機構では、2週間のサマープログラムに参加する留学生を支援することを主な目的として全学教育科目<sup>1</sup>「国際理解：留学生支援で学ぶ異文化理解」を開講した。サマープログラムのような留学プログラムに参加する留学生を支援する方法としては、ボランティアの学生や留学生支援を主な活動としたサークルに頼る方法が一般的であるが、今回は全学教育科目の受講生を母体にすることにした。留学生支援を主軸とした授業を開講することは、支援される留学生だけではなく、支援する側の受講生にとっても教育的意義があると考えたことが開講のきっかけである。具体的には支援前の講義や準備、プログラム開講中の支援、そして支援後の振り返りを一連の流れとし、活動報告書等の提出を課題とした。活動報告書等の記述を分析したところ、今回の実践が受講生に異文化理解の機会を与え、サポーター育成の方法として有効であることが明らかになった。

The purpose of this paper is to introduce the general education course titled “International Understanding: Intercultural Understanding Through International Student Support,” which was established to support participants of the summer intensive program. Usually, volunteers and club members of international student support circles are the ones who help such short-term overseas study program participants. However, to educate students at our university, we have decided to open this new course. The course was organized in the following order: lectures and preparation for support of international students, summer program activity support, and reflections. The content of students’ reports and reflection papers revealed that this course improved students’

---

<sup>1</sup> 横浜国立大学では2017年度より教養教育科目を全学教育科目と改称した。

intercultural understanding and created an effective supporter-training opportunity for the summer program.

## 1. はじめに<sup>2</sup>

本学国際戦略推進機構では 2017 年度および 2018 年度にサマープログラムと連携する形で全学教育科目「国際理解：留学生支援で学ぶ異文化理解」を開講した。大学において日本人学生が留学生を支援する方法としては、チューター制度、日本語ボランティア、国際交流サークルなどが挙げられ、サマープログラムでの支援を行なっている事例もあるが（岡崎他 2014、永井 2014）、授業を母体にした実践例は管見の限り見当たらない。

留学生支援を主軸とした授業を開講することは、支援される留学生だけではなく、支援する側の受講生にとっても教育的意義があると考えたことが本科目開講のきっかけであるが、受講生にはどのような学びがあったのだろうか。本稿では授業の概要を報告するとともに、受講生の活動報告書と振り返りレポートを分析し、受け入れ前の準備の段階から実際の支援活動、さらに振り返りに至る一連の流れを通して受講生にどのような学びがあったのかを明らかにし、今後の留学生支援のためのサポーター育成の可能性を探る。

## 2. サポーター育成の経緯と意義

本学では 2016 年度から YNU サマープログラム（以下サマープログラム）という名称でサマープログラムを開講している。年度によって開講の目的や対象者は異なっているが、7月上旬の2週間という期間の間、各国からの留学生が日本語や日本文化を学び、日本での生活を体験するという点は共通している。また、毎回日本人学生との交流をプログラムの特徴として掲げている。そのため、初年次は学内でボランティアサポーターを集め、ホテルと大学間の送迎やキャンパスツアー、日本語授業の際の補助など、さまざまな活動に携わってもらった。その結果、サマープログラムに参加した学生とボランティアサポーターには授業時以外にも交流が生まれ、プログラム終了後もそれは続いていることがわかり、サマープログラムにおける留学生支援が参加留学生と本学学生の交流や異文化理解を促進するという点で有益であることが示唆された。しかしながら、ボランティアを確保することは容易ではないこと、またボランティアという性格上、依頼できる支援内容が限られていたり、確実に支援をしてもらえるという保証がないという問題点も明らかにな

---

<sup>2</sup> 本稿は 2018 年 4 月に開催された韓国日語教育学会の予稿集「留学生支援と異文化理解を目的とした一般教養科目 - 短期留学プログラムのためのサポーター育成の実践と課題 -」の発表要旨を書き改めたものである。

った。それらの経験から、ボランティアサポーターに頼るのではなく、サマープログラムに参加する留学生を支援することを主軸においた授業を開講してサポーターを確保するほうがいいのではないかと考えた。さらには、支援前の講義や準備、プログラム開講中の支援、そして支援後の振り返りを一連の流れとした授業を開講することで本学学生の異文化理解教育にもなるのではと考え、全学教育科目の枠組みで「国際理解：留学生支援で学ぶ異文化理解」を開講した。

全学教育科目を開講してサマープログラムに参加する留学生を支援することにはさまざまな意義がある。まずは、受講生である本学学生にとってのメリットとしては、留学生との交流を通し異文化に触れ、自分の価値観とは異なる考えを学べることが挙げられる。本学では平成30年11月現在1045名の留学生を受け入れているが、日本人学生が留学生と交流する機会は十分とは言えない。藤井（2014）は留学生を対象に実施したアンケートの回答から留学生と日本人学生に交流が十分ではないことを指摘し、日本人と留学生をつなぐ仕組みづくりの必要性に言及している。そのため、授業の形でそのような機会を日本人学生に提供することができれば、留学生との関わりが増え、グローバル人材の育成にもつながると考えられる。

また、サマープログラムに参加する学生にとっては、プログラム参加中に日本人学生と日本語を使って交流ができること、さらには、学習面や生活面などにおいて疑問点や不安なことがあった場合に相談する相手ができるという点が一番のメリットであろう。ボランティアサポーターに支援を依頼した1年目のアンケート結果では、日本語クラスでのサポーターの役割についてのみ回答を求めたが、アンケート回答者7名全員がボランティアサポーターの存在が助けになったと回答し、特にサポーターと日本語で会話できたことに満足感を得ていたことがわかった。アンケート結果にはあられなかったが、ボランティアサポーターには買い物や観光地に関する情報を聞いたり、地域のイベントにも一緒に行ったという報告があり、学生同士であれば留学生も相談もしやすかったのではないかとと思われる。留学生が気軽に相談できる環境があるということは、彼らの声がサポーターを通してプログラムにも届きやすいというメリットも考えられ、それは運営する側にとっての利点でもある。

### 3. 2017年度サマープログラムおよび国際理解科目「国際理解：留学生支援で学ぶ異文化理解」の概要

本節では2017年度に開講されたサマープログラムと国際理解科目「国際理解：留学生支援で学ぶ異文化理解」について報告する。表1は2017年度のサマープログラムの概要お

よびサポーター数を示したものである。2017年度は25名の留学生が参加し、参加者の出身国は中国、韓国、アメリカをはじめ5カ国となった。サマープログラムに参加をした動機はさまざまであったが、初めて日本に来た学生がほとんどで、自分が学んでいる日本語を使ってみたい、日本文化を体験したいという目的のほか、将来の大学院進学を見据えて下見を兼ねて参加したという学生もいた。

表1 2017年度YNU日本語日本文化サマープログラムの概要およびサポーター数

期間	2017年7月3日(月)～7月14日(金)
目的	日本語・日本文化の研修および日本の生活体験
対象	協定校の学生を優先するが大学または大学院所属であれば応募可
国籍別参加者数	中国16名・韓国4名・アメリカ3名・ハンガリー1名・UAE1名 (計25名)
日本語能力	日本語能力試験N4レベル以上
日本語クラス	上級クラスと初中級クラスの2コースを開講
日本文化クラス	日本事情、歴史、映画
その他の活動	日本文化や日本で調べたことについてポスター発表 全員がホームステイに参加(1泊2日) 見学旅行(味の素川崎工場・民家園・鎌倉方面等) 大学院進学希望者に進学相談を実施
サポーター数	国際理解クラス受講生6名・ボランティアサポーター29名(のべ)

その25名の留学生を支援したのが「国際理解：留学生支援で学ぶ異文化理解」の受講生6名であった。受講生のうち1名は交換留学生で、5名は学部生であった。6名それぞれの受講の動機はさまざまであったが、留学生と交流してみたい、英語を使う機会を増やしたいというのが主なものであった。韓国出身の交換留学生は日本語が上級レベルの学生で、以前母国で日本人学生のサポートをした経験から同様の授業を受講してみようと思ったのが履修のきっかけだったと述べていた。

以下の表2は授業の目的と概要を示している。全15回の授業のうち、7回を講義および事前の準備、7回を実践活動、1回を振り返りにあてたが、実践活動に関してはサマープログラム中の活動に参加することを出席とみなした。

受講生は事前に日本語教育、第二言語習得、異文化コミュニケーションなどの講義を聴きその中から興味を持ったテーマについてレポートを書いた。その後はサマープログラムに参加する留学生の出身国について調べたり、彼らが興味を持ちそうな日本文化について情報を収集したりした。また、それぞれに担当する留学生を割り当て、事前にEメールでのやりとりをすることも課題とした。

表2 「国際理解：留学生支援で学ぶ異文化理解」授業の目的と概要

授業の目的： 講義・実践活動を通して、異なる文化や言語背景を持つ人々の考え方を知り、理解することで異文化コミュニケーションを円滑に図ることができるようになる。		
回	授業概要	提出課題
1	授業の概要・サマープログラムについて説明	
2～4	講義（国内外の日本語教育・第二言語習得・やさしい日本語・留学生とのコミュニケーション）	レポート
5～7	留学生受け入れの準備	サマープログラム参加留学生とのメールのやり取り
8～14	実践活動	活動報告書 振り返りレポート
15	振り返り	期末レポート

留学生が来日してからの支援の内容としては、ホテルと大学間の送迎、大学や周辺情報を教えるためのミニポスター発表、キャンパスツアーの引率、日本語の授業での会話の練習相手、日本文化講義や見学旅行への同行、プログラム最終日のポスター発表会の準備の手伝いなどであった。受講生はサマープログラム開催中最低7コマ（1コマ90分）分の活動に参加することが必須となっており、7回分の活動報告書を提出することが課題となっていた。他にも、サマープログラム終了後には振り返りのレポートの提出が課題となっていた。

#### 4. 受講生の活動報告書と振り返りレポートの分析

受講生の活動報告書と振り返りレポート課題に書かれた受講生の気づきや学びがどのような性質のものだったのか、国際理解クラス受講生6名の活動報告書7回分および振り返りレポートからわかったことを分析した。活動報告書には日付、参加した授業や活動の概要、活動中の自分の役割と留学生との活動の中で気づいたことを記入することになっており、それらの記述内容や活動全体の振り返りを記したレポートの内容を基に分類を試みた。

その結果、受講生の活動報告書および振り返りレポートの記述はその内容から主に異文化理解に関するものと日本語に関するものにまとめることができた。そこから、本実践のような活動が今後の短期・長期の留学生支援のためのサポーター育成の方法の一つとして有効かどうかを検証することにする。

##### 4-1. 異文化理解に関する記述

まず、第1回目の活動報告書の内容からは以下の①、②にあるように主に外国人や外国

に対するイメージが実際と異なっていたことへの気づきや留学生の日本語力に注目している記述がみられていた。

- ①英語が母国語の人ははきはきと堂々と喋るイメージがあったけれど、やはり日本語のように自信のない言語で喋るとなると声が小さくなったりして新鮮な感じがした。(1回目、Kさん)
- ②私が想像していた以上にみんな日本語がうまくてびっくりした。(1回目、Mさん)

しかし、2回目以降からは自分たちが持っていたイメージに関する記述は減り、以下の③～⑤のように他国と自国との文化の違いや普段気づかなかった自国のことで新しく気づいたことについて記述している傾向がみられた。

- ③日本のマンガについて、海外の人が思う人気マンガと日本人が思う人気マンガには違いがあった。(2回目、Sさん)
- ④留学生Aが日本の地下鉄で英語表記(ローマ字表記すら)がない駅があって不安だと言っていた。私は日頃の生活の中でどこにでも英語表記が添えてあるように感じていたけれど、まだ十分ではないのだと思った。(2回目、Wさん)
- ⑤調査に関するアドバイスについては、日本人学生に失礼のないようにとたくさん意見を聞かれたので、やはり日本と中国とではしてもよい質問とそうでない質問が違っているのかなと疑問に思った。(3回目、Sさん)

さらに、後半の6回目、7回目になると以下の⑥、⑦のように他国の文化に関する新しい発見や他者の文化を尊重し配慮しようとする気持ちに加え、もっと他国や自国のことについて知りたいという好奇心がうかがえる記述がみられるようになった。

- ⑥日本人も汚い言葉を使うと思っていたけど、中国とか韓国ではもっとここでは言えないような言葉をいうということで、それが驚きだった。どんな言葉なのか疑問です。(6回目、Mさん)
- ⑦暴言の話題で日本には暴言が少ないことを知って驚いた。鎌倉の話では、大仏や大きな草履が面白かったと聞いたけれど、日本と中国の仏教ではどのような場所が違うのか気になった。(6回目、Cさん)

以上から、受講生は留学生との交流を通して、はじめは自分たちのイメージと異なる異

文化の存在に気づき、交流を深めていくうちに自国と他国の文化に対する理解を深めていく様子がみられていた。さらに、サマープログラムが終わる頃には両者の文化に対しさらなる興味を持つ様子がうかがえた。このような受講生の意識の変化は複数回にわたり留学生と交流を続けてきたことによって起こった変化であると推測できる。また、日本語の授業や課外活動などさまざまな場面での支援に携わっていたことも影響していると思われる。

#### 4-2. 日本語に関する記述

日本語に関する記述では、支援する留学生の日本語レベルによって内容に違いがみられた。初中級の日本語クラスに参加した受講生の場合、⑧にあるように主に留学生の日本語のレベルが異なることによる言語的な配慮の難しさについて悩んでいる様子がうかがえる。しかし、上級の日本語クラスに参加した受講生からはそのような報告はみられず、⑨や⑩のように日本語に対するサポーター自身の知識の足りなさや説明の難しさに関する記述が多数みられた。

⑧日本語のレベルが異なる子を同時に対応するのが難しかった。(1回目、Sさん)

⑨オノマトペのニュアンスを具体的に伝えるのがとても難しかった。

(3回目、Kさん)

⑩質問をするときはより具体的な内容を定型文でゆっくり話す必要があるとわかった。

(5回目、Cさん)

これらの記述を通して、今後サマープログラムのような留学プログラムのサポーターを育成するためには、日本語を客観的に分析し、やさしい言葉で言い換えられるようにあらかじめ指導しておく必要があると考えられる。しかし、そのような指導は短期間でできることではなく、学習者の日本語レベルや同一クラス内のレベル差というのは毎回異なることから、柔軟な対応を心掛けさせる必要があると思われる。本実践でも実際にそのような指導は講義の中で行っていたが、経験が伴わない場合は対応が難しいことがこれらの記述からうかがえた。

#### 4-3. その他の記述

その他に、⑪のように留学生の日本語学習への意欲や向上心などに刺激を受けている記述がみられた。また、⑫のように後半のポスター発表の支援では関わりのあった留学生の成長に支援のやりがいを感じている様子や⑬のような支援における問題点を見つけ、具体的な改善策について言及しているものもあった。

- ⑪一番強く思うのは、参加してよかったなあ、ということだ。留学生として、日本語や日本についてたくましく学んでいる姿をみてとても刺激をもらったし、自分の将来について彼らほどきちんと考えられていない自分に対する焦りも覚えた。(振り返り、Wさん)
- ⑫全ポスターが調べたことを発表するだけでなく、+α分析や考察を加えていて、各々新しい発見をしていたのに感動した。(6回目、Sさん)
- ⑬(前略) もっと日本のことがわかるカリキュラムを設けられたのではと思いました。例えば、3限目に茶道体験、生け花体験、浴衣体験など、文化的な体験をする時間を設けられたら、日本に興味があった参加者たちがもっと日本のことを体験できたかもしれません。(振り返り、Kさん)

これらの記述から留学生との交流が受講生にいい刺激になり、さらによりよい支援について自ら考えるきっかけを与え、それがサマープログラムの運営に対するフィードバックにもつながったと思われる。

以上の記述内容から、国際理解クラスの受講生がサマープログラム中の支援に積極的に取り組み、学内外で留学生と関わりを持ったことが彼らの刺激となり、また学びとなったと考えられる。

## 5. まとめと今後の課題

本稿では、サマープログラムのためのサポーター育成を目的とした教養科目の受講生の活動報告書と振り返りレポートを彼らの学びや気づきを中心に分析した。

その結果から、短い期間ではあるが、複数回継続した支援活動を通してサポーターの異文化に対する理解が深まり、支援した留学生の文化や自国の文化についてもっと知りたいという気持ちが芽生えていたことから、今回の支援がさらなる異文化との交流につながるきっかけを与えていたことが示唆された。また、日本語に関する記述では、母語である日本語についてもっと知りたいという気持ちから日本語を客観的に捉えようとする姿勢がみられた。さらに、受講生らは支援活動における問題点を見つけ、今後どうすればよりよい支援ができるかなどの改善策を提案しており、これは運営側へのフィードバックにもつながるものである。以上から、今回のサポーター育成のための授業は、一定の成果が得られたと考えられる。

しかし、さまざまな課題も明らかになった。授業では異文化理解や「やさしい日本語」



について学ぶ機会を設けたが、どのようなことをどの程度教えるべきかが今後の課題である。具体的には、異文化理解については授業で事前に扱える内容は限られているため、知識よりも異文化に接した際の心構えなど意識的な準備が必要であることがわかった。さらに、「やさしい日本語」についても同様で、知識があっても経験がないと現場での対応は難しいため、指導内容や方法に工夫が必要なことが明らかになった。

支援の内容や方法はプログラムのカリキュラムや参加学生によって変化するものであることから、これからは支援する留学生のことを考え柔軟に対応できるようなサポーター育成を視野に入れて授業を展開する必要があると考える。

#### 参考文献

- 岡崎智己・高原芳枝・西原暁子（2014）「九州大学におけるサマーコースの実践—2013 年 ATW プログラムの概要と実施報告」『九州大学留学生センター紀要』第 22 号、191-198.
- 永井智香子（2014）「二度の留学生センターサマープログラムを振り返って」『長崎大学留学生センター紀要』21-22、31-46.
- 藤井桂子（2014）「留学生は何に困難を感じているか—2003 年と 2012 年のアンケート調査結果から—」『ときわの杜論叢』第一号、145-171.